

リーディングDXスクール事業【実践事例】

大分県立情報科学高等学校

【取組内容】デザインシンキングの手法を用いた学年進行による協働的な学びの醸成

[実践授業①]

総合的な探究の時間 ～1年生～

①デザインシンキングの基礎を学ぶ
目的:デザインシンキングの手法を知る

手法:協働で思考を深めるブレインストーミングに取り組む。
テーマ「小学生が本(活字)を読むには」



②クラウドを活用したデザインシンキング
テーマ「地域防災の課題を解決しよう」

テーマに沿ってデザインシンキングの手法を生徒同士で実践。同時進行で資料を確認しながら、クラウド上(パワーポイントの協働編集)で自由に意見交換をする。アイデアの創出には生成AIを活用しながら、他者の意見と自身の意見を比較しながら、アイデアをグループで醸成していく。



[実践授業②]

課題研究

～2年生～

①[第1段階]1年次に取り組んだデザインシンキングの手法を用いて個人で深めていく。一人一人が、興味関心のあるテーマを設定し、課題解決の手法をペルソナ設定からアイデアの深堀、アイデアの創出へとつなげていく。時には他者のアドバイスを聞きながらも個人で取り組む。



②[第2段階]第1段階での個人の取り組みを踏まえ、各学科の特性を生かした専門的な観点から課題解決へのアプローチを研究する。第2段階では協働による学びにすることで、より専門的な視点での意見の活性化が見られる。データはすべてクラウド上で共有し、学校外でも協働的な学びを実践できる。



[実践授業②]

課題研究

～3年生～

①2年次から同一テーマで、継続による協働での課題解決へ取り組む。成果物の作成(デモ機やモックアップ)もしくは成果発表を通じて、PDCAサイクルを実践し検証を行う。外部連携を行うことで、アイデアだけで終わらずに専門家からのアドバイスや実証実験によるデータの取得を行う。



②成果発表会による次年度への継承
下級生に向けた成果発表会を実施。内容及び発表の手法を後輩へと引き継いでいく。発表会は関係者に公開され、地元企業や保護者などが参観に訪れる。



・学年進行でデザインシンキングの学びを深めていくことで、生徒が主体的に活動し実践することが可能になった。
・アウトプット(成果物や商談など)を外部の専門家や実機の運用を行うことでデータの習得が可能になり、より実践的かつ学びの深化につながった。

※両授業に対する生徒アンケート

	総合的な探究の時間	課題研究
積極的に取り組めた	99%	96%
授業満足度	92%	90%
将来役に立つと感じる	98%	97%

リーディングDXスクール事業【実践事例】

大分県立情報科学高等学校

【取組内容】 クラウドを活用した授業課題や課題提出、アンケート集約等生徒の実践的な情報活用能力の育成

【自由進度学習による活用】

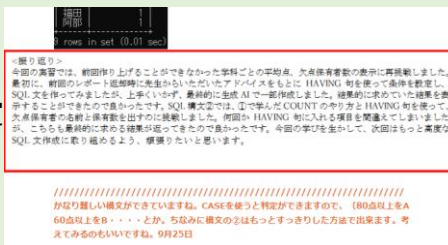
学習進度を自分で決め、1時間完結で、目標と振り返りを行う。課題の提出はクラウド上（office365）で行う。毎時間の振り返りを行いクラウド上に保存することで、次の時間の目標を立てることが可能になり、次時への導入がスムーズになる。

◇Office365を活用 →
した提出課題の様子



【提出課題による個別添削】

振り返りを大切にする課題の提出。個別添削。内容の振り返りと個別の指導がそれぞれの個々の学習意欲を高め、目標設定が可能になる。



↑ 個別添削による生徒の取り組みの変容

【積極的なアウトプットで理解を促進】

「説明が他人にできて教えられること」を条件に自分なりにわかりやすくまとめさせる。既習事項をいくつかきちんと組み立てて考える論理的思考力と、正しく表現する力、そしてわかりやすく説明する力が必要になり、本質的な理解につながる。自分の中にあるパーツの組み立てを頑張る生徒が確実に増えた。



【自身のプレゼンを他者から評価】

自身のプレゼンに対する評価アンケートをFormsを活用して自身で作成し、コメントを収集する。

次回への改善点として役立てることで、自身のブラッシュアップにつなげていく。得られた回答は生成AIを活用して集約も行う。

また、他者に対する評価を行うことで評価者としての意識も向上するとともに自身との比較に役立っている。

【授業後の活用で思考時間の確保と欠席者の対応】

授業における板書をTeamsにアップ。もう一度思考をしたい人やじっくり考え直したい人に好評。また欠席者にとっても授業の遅れが気にならない。授業配信も実施。会議により認定を受けた生徒に対し、全授業配信も行う。イベントや行事についても極力欠席者への配信を行う。



【生徒一人一人の看取りを評価へ】

Formsで意見集約発言する生徒だけでなくすべての生徒から考えや思考の様子をとらえることができる。発言するより記述の方が多くの考えをリアルタイムに知ることができる。意見を参考に授業改善にも役立つ。またグループ活動においてはWordやPowerPointなどで協働編集作業を行い、その記録を評価にしていける。生徒一人一人の看取りにつながる。

社会に出て活用できるように、何をどの場面でどのように使ったらいいかを考える力を身に付けさせる。

情報活用を自分で選択できる選択肢を増やす取り組みを高校で実践

リーディングDXスクール事業【実践事例】

大分県立情報科学高等学校

【取組内容】校務DX：ファイル管理のクラウド化と校務の効率化を実現させる活用事例集の共有

◆会議の削減

チャットスペースを分掌ごとや授業担当者ごとなど用途に応じて開設。

事前資料の配布や再確認、履歴による確認などが可能になり、会議時間の大幅な短縮と回数の削減を実現。

共有分掌（一人が複数の分掌にまたがる）にも対応できるため、不在でも確認ができるとともに日程の調整の必要がなくなった。分掌によっては年間8回の会議をすべてチャットスペースを活用する方法で実施できた。

このチャットスペースの活用については実践例の報告とメリットを職員研修（2か月に1度）で報告した。

結果チャットスペースの利用が10スペース以上増加した。



◆アイデアの共有

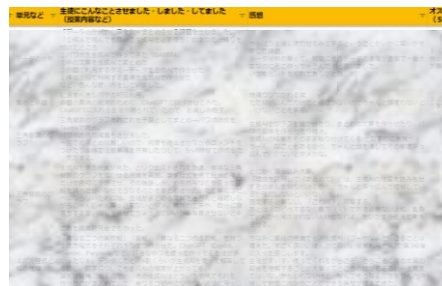
クラウドを活用した様々な事例を生徒利用、教員活用で常時募集。普段の何気ない取り組みを気軽に入力できるようにスプレッドシートを活用。

現在で100以上の活用事例が集まっている。

また、職員研修（20分限定で2か月に1回実施）にて分掌が紹介。アイデアを基にしたさらなるアイデアにつながるなど先生方の活用のヒントが広がりを見せている。

授業への展開も見られるようになった。

職員研修のモットーは「使って楽しい」「仕事が楽になるを実現」



◆データの共有

これまで閉ざされた空間のみで利用できるグループウェアを活用した情報共有（日程や行事関係、提出書類）をしてきたが、これを徐々に変更。分掌主任を中心にデータの保存場所や共有場所を外部から活用できるようにした（セキュリティ上問題のない状態）年度途中からの実施のため、浸透度はまだまだ十分ではないが、職員研修を活用して徐々に浸透。データの保存方法もURLによる保存。

使ってみると便利が徐々に浸透→先生の普段使いが生徒の普段使いに